

市仏連会報

発行所
 横浜市中区大平町96
 光明山西有寺内
 横浜市仏教連合会
 電話 045(661) 0166

戊午の新年を迎へて

会長 志村 慎 吾

昭和五十三年戊午の歳の年頭に
 当り謹んで新年のご挨拶を申し上げ
 ます。併せて旧年中のご高庇を
 厚くおん礼申し上げ、本年も格段
 のご法愛とご支援をいただきたく
 衷心よりお願い申し上げます。

昨年は国内、国外を含めまして
 いろいろな問題が起りましたが、
 何はともあれ、こうして正月を迎
 えさせていただいた仏恩、世恩に
 対して、お互いさまに感謝しなけ
 ればなりません。それと共に、私
 どもは新しい気持ちでこの一年を
 踏み出さなければなりません。私
 は昨年丁巳の歳の年頭にも申し上
 げましたが、禪門の正月は「大般
 若から」と申しまして、大般若経
 六百卷の転読を年頭三ヶ日間毎日
 暁天より厳修します。この六百卷
 の転読をしない寺でも、第五七八
 卷目の理趣分経を繰って、護国
 家、万民和平、五穀豊穡、家内安
 全のご祈禱を致しておるのであり
 ます。これは修正会とも申しまし
 て己の心を正し、仏教徒の真面目

- 歳旦拙偈
- 旭日彩雲年是新
- 梅辺眼院太平春
- 元正一句生塵生
- 鉄馬嘶風戊午晨
- 昇天山主拝祝

挙揚に怠りなく精進して「為人度
 生」の仏法大精神に徹することを
 誓う厳肅な禱家の年頭仏法なので
 あります。日本には資源はありま
 せん。したがって人間こそが財産
 であり、国の宝なのです。その日
 本国の一人一人が随落したのでは
 日本は滅亡してしまいます。
 人間を正しい道に導き「為人度
 生」の実践、これぞ、緊急必要に
 して一刻を待たない現状を呈して
 いる時期はないと、昨年の国内外
 に起きた諸問題を見て痛感する一
 人です。

鎌倉・建長寺のご開山の蘭溪道
 隆大覚禪師様は、昨年が正当、入
 寂七百年に当りまして五月中旬七
 百年大遠忌法要が営まれました。
 この禪師様が当時建長寺僧林に修
 業する百余の雲水に日常底の内規
 として「法語規則」を垂示されて
 おりますがその冒頭に
 鞭影ヲ見テ後ニ行クハ即チ良
 馬ニ非ラズ、訓辞ヲ待ツテ志
 ヲ発スルハ実ニ好僧ニ非ラズ
 諸兄弟同ジク清浄ノ伽藍ニ
 住シテ己ニ饑寒ノ苦シム無シ
 当ニ此ノ事ヲ以ツテ茲ヲ念フ
 事茲ニ在ルベシ」云々
 と云はれております。
 思うにこの言葉は独り建長寺
 一派の僧侶にとどまらず広く私ど

も、仏教を信じてはじめてなし
 得たも、神の教えはわれわれに、お互
 いに愛し合い、純粋に平和を求め
 よ、と教えているではないか云々」と
 と喝破絶唱したことを深く銘じ
 て、独りよがりや、一派一宗のとり
 ことなることなく、偏狭な心を捨
 てて進んでわが連合仏教会の僧伽
 の結集、結制に加って、たとえお
 互の灯火は小さい灯であっても、
 万々灯となって高くかかげ、苦難
 の世情を明るく照して行く巨いな
 る灯としようではありませんか。

本会名誉会長に

乙川瑾映禪師

が上山、祝意を
 表すと共に、
 前名誉会長岩本
 勝俊禪師同様そ

旧年十月十五日曹洞宗大本山総
 持寺（鶴見区鶴見）独住十九世勅
 賜正応天真禪師 岩本勝俊況下が
 「近來四大調類老す。出所宣しき
 に従うは是自然」の語を残して退
 董された即日、宗制の定むる所に
 よって乙川瑾映副貫首（大雄山主
 が総持寺独住二十世として晋董さ
 れ十月二十一日、一宗歓迎の中に
 入山式を挙行。当日今上陛下より
 仏海真光禪師の勅賜号が宣下され
 た。

本会では、会則により名誉会長
 に推戴し指導を仰ぐこととなり、
 志村会長以下福永、横山両副会長

仏教を現代に生かそう

— 全日仏埼玉大会盛況 —

全日仏と埼玉県仏主権の第二十五回全日本仏教徒会議埼玉大会（大谷光暢総裁、大島見道大会長）は「仏教を現代に生かそう——」のちを大切に——を大会スローガンに、十月七日、埼玉県浦和市の埼玉会館を会場に全国から千八百人の代表が参集し、盛大に挙行された。

大会は七日午前九時三十分、埼玉会館大ホールで、柳了堅大会事務局長の開会宣言で始まり、大会々々長大島見道埼玉県仏教会長の導師で法要が営まれた。

大会総裁の式辞に次いで田辺哲崖全日仏理事長が「全日仏は釈尊の教えのもと中道と慈悲の実践により、内には人間性を尊重した人々心調和の和合社会建設と、外には仏教を通じて相互理解に基づく国際親善交流に努力している。本大会は明年の第十二回世界仏教徒会議日本大会に向かって、更に国内仏教徒が調和と統一を推し進めることに大きな意義がある。互に自慈の心で全人類の真の幸福追求を図るよう心がけたい」と挨拶した。

また大島見道大会々長は「現代我々が当面している問題は、世相の混乱、人心の荒廃、人命軽視、環境破壊など、枚挙にいとまなく、これら人心の不安に対して二千五

しよう（埼玉県仏提案）

第三部会（婦人部会）は、①婦人として仏教の本義に生きよう（全日本仏教婦人連盟提案）②仏教徒は率先して生命尊重の運動を起こそう（埼玉県仏提案）

第四部会（青年部会）青年の生活に仏教を生かす具体的方策）は①寺院を青少年の研修道場として開放し、コミュニケーションの場として寺を現代に生かそう（全日本仏教青年会提案）②寺院行事を見直し、新しい教化のあり方を考え、青少年が喜んで参加できる行事の実践をしよう（全日本仏教青年会提案）

各部会とも熱のこもった論議を展開し、午後三時からの総会に報告して議決、大会宣言・大会決議を採択して同四時の閉会式をもって盛況裡に散会した。

本大会の大会宣言と大会決議は左の通りである。

大会宣言

石油ショックを契機として物質万能の夢は破れ、巷には「心の持ちかたを変えねばならぬ」との声が流れはじめて既に久しい。しかし、その精神的転換をいかにして具現するかについては、未だ暗中摸索しているというのがその実態である。

省みれば過去百年、われわれは文明についての正しい認識を見失っていた。たとえば、学術の研究は人類の福祉と文化創造という目的のための手段としてその価値を

有すべきにかかわらず、自然科学の進歩はかえって人類破壊への兇器の存在となり社会科学の発達もまた、人間に黄金の仮面を冠らせてエコノミック・アニマルという動物的次元へと退化させ、いわゆる精神の倒懸状態を出現せしめたのである。また人間形成の教育の場にあつては、教育体系は乱れ、一部にはイデオロギー培養の温床となり「学校盛んにして教育亡ぶ」とまでいわしめる現状となつた。

さらに社会一般においては、金力権力、暴力とう人間煩惱が大手を振って横行する世相が出現した。今夏、福田首相は東南アジア各国歴訪に際し、「マニラ声明を発したが、その一節に「真の友人として心と心の触れ合う相互信頼関係を築く」とある。しかし、今日のこの精神的風土をそのままにしていうが如き国際的信頼関係が果たして可能であろうか。

日本仏教は千四百年、生活に教育に文化に、常にわが国歴史形成の指導原理となつて輝かしい実績を積み重ねてきた。しかし明治以来の行政は、仏教の真面目を發揮することを許さない面が多々あつた。われわれ仏教徒は、その事情がいかにあろうとも、そこに人類の苦悩が存在する限り、力を合わせて救済に立ち向わねばならない。さらに来るべき時代における指導原理もまた仏教をおいてほかにないを確信する。

明年十月には、日本において第十二回世界仏教徒会議が開催される。今日の国際情勢に鑑み日本仏

教徒は総力を結集し、仏教を通じて真に心と心の触れ合う国際親善の樹立に貢献しなければならぬ。

われわれは茲に「仏教を現代に生かそう」のスローガンのもと、生命尊嚴の教法に基づいて空論を排し、新しい時代の要請に応え、創意をめぐらし、仏教が最高の指導原理として国民生活の隅々にまで脈うつよう努力精進することを誓うものである。

大会決議

一、われわれは、来るべき時代においても世界の苦悩を救う指導原理は、仏教をおいてほかにないを確信する。

一、われわれは仏教のもつ宝をいかにして現代生活に生かすか、その具体的方途実現のため精進する。

一、われわれは、日本仏教徒の総力を結集し、来るべき第十二回世界仏教徒会議の成功を期す。

一、われわれは、核爆弾をはじめ恐るべき科学兵器の即時廃絶を世界人類の良心にうったえ続ける。

一、われわれは、青少年の自殺など生命軽視の風潮に鑑み、生命尊重の具体的運動を展開する。

一、われわれ仏教婦人は、仏教による女性の正しい道を鮮明にし、混乱せる家庭生活に光を掲げるよう精進する。

一、われわれ仏教青年は、若き勇猛心を奮起して、仏教を現代社会に生かす努力を果敢に邁進する。

右決議する。

『法 話』

大本山総持寺特派布教師

阿部圭祐老師

「皆さんこんにちわ」「……………」
 「「お返事がございませんね」
 「……………」「ではやり直して」
 「「こんにちわ」皆さんこんにちわ」
 「こんにちわ」と言う事で皆さんも御挨拶ができませんでした。先日、小田原のある河川の土手の狭い道を行きますと向うから子供が二人やってきました。そこで私は道をゆずって「こんにちわ」と申すただ赤い顔をして黙って通りすぎてしまいました。この子供達にはありがたいと思う心がないのでしようか。子供は親の鏡と申します。ある日、お釈迦さまが弟子の阿難と散歩をしていますとそこに袋が落ちていました。「阿難よそれをひろって匂を嗅いでごらん」と申され阿難はさっそくひろい嗅いでみまますと香袋らしく大変良い香りがしました。するとお釈迦さまは「阿難よ、良い香りのするものはそれにふれたものも良い香りにしそれを持った人の心も楽しくするな」と申されました。私達も気をつけなければいけません。体は常に清潔にしそして心は常に良い香りのする人でありたいものです。さて私達は何とはなしに見ている太陽、これもなかつたら作物も動物も生きられません。大地もなかつたら家も建てられませ

あります。私達は常に「ありがたい」の気持を持ちそれを常に実行する事が大切なのです。何一つしてもらっても「ありがとう」と心から感謝しお礼をのべる事です。こうする事により家庭は明るくなり職場も明るくなりやがて社会も国も皆んな明るくなるのです。これをお示し下されたのも正にお釈迦さまでございます。成道会にあたり「ありがたい心」という事を中心にお話をしました。皆さん今からさっそく実行して下さい、とお願ひしてこのお話を終ります。
 昭和五十二年十二月八日
 保土ヶ谷旭区仏教会主催
 成道会法話 於 正観寺
 (文責 玄野)

寺院管理市有墓地問題

墓地専門委員長 佐藤 寿広

九月三十日志村市仏会長、佐藤委員長同道市役所に新任の衛生局長、総務部長、業務課長を訪問し墓地問題の促進について依頼した之に対して

1. 幹部全員変わったので担当者からよく事情をきく。
2. 登記簿抄本の請求については早急に進める。
3. 事務が進展するよう努力するとの回答を得た。

十一月十九日、先般市役所から要請があつた証拠書類写しと図面を提出した。この関係書類は市当局で審査をする上に必要なので、前記の書類があつて未提出の方は是非事務局へお出し下さい。

安藤文雄師

本会参与、神奈川県仏教会副会長、戸塚区仏教会長、曹洞宗徳翁寺住職安藤文雄師(戸塚区川上町五四六)は四大不調のため療養中であつたが一月十三日世寿七十八をもって遷化された。

師は、昭和十三年県仏教会発足当時より役員として、県、市、区仏教会を指導して来られ、また宗内にあつては総持寺の重鎮として全国嶽山会々長を勤められる等その活動範囲は巾広く、権大教師、黄恩衣被着をもつて遇されていた本葬は一月十九日午前十一時大本山総持寺監院松浦英文師大導師のもとに厳肅に執行され、本会より常務理事等各役員が出席焼香した当日会長は左の弔辞を捧呈し津渡の誠をささげた。

弔 辞

『梅辺の睨院まさに太平の春を告げんとするとき、突如、本会参与安藤文雄大和尚遷化の悲報に遭ひ只今、こうして真前に慇懃合掌して香を献じ深く頭を垂れて告別の蕪辞を呈すとは、神ならぬ身の誰れか此の事たるを予期できませうか、嗚呼悲しい哉、「無常迅速、時人を持たず」とは。』

然りと雖ども今日、徳翁三十三世百川文雄大和尚の報恩送行の淨儀に随喜し、一派宗門の御重役、大方尊宿を始めとし、神奈川県仏教会役位の大方諸老宿、地元公共団体関係各位、檀信徒各位、一般来賓各位等、此の座に多数随喜参

集しておられますのは、五十有余年の間、当山の董住し、朝念、暮念、只管宗旨の挙揚を念じ専ら、「為人度生」の禅風を随処に主となつて刻苦精勵して、此処に高くなつた禅僧の尊いご生涯、ご高徳を衷心から讃揚せんとするものでございまして、誠に尊とぶべき極みに存じます。

これをこれ想うとき、「明頭来也明頭打、暗頭来也暗頭打」と鈴を振り鳴らしつつ隠々として虚空に脱出し行く、百川文雄大和尚禪師、また、またもつて冥すべきと存じます。

茲に、五百有余ヶ寺の横浜市仏教連合会を代表し御生前中の幾多功績を讃え衷心より感謝の意を表し一言蕪辞を奉呈し告別の辞といたします。

伏して願くば、大寂定中、茲慙を垂れて後昆を永に導き給わらんことを。」

昭和五十三年一月十九日

横浜市仏教連合会

会長 志村 慎 吾

尚、後輩は法嗣安藤文正師である

専務理事に

玄野 孝善師

志村会長は、かねてより横山副会長の事務局(専務理事)兼任を解任させたいと念願し言明して来たが適任者が応募せず苦慮していたところ、横山副会長の個人事情が時を待たず、また保土ヶ谷、旭区仏教会からの強力な推薦により、曹洞宗長昌寺副住職玄野孝善師を専務理事に指名し、その快諾を得て一月二十日付をもって辞令を出した。伝達式は二月十四日涅槃会の席上で行なわれる。

賀

春

市 仏 連 参 与
港 北 仏 教 会 会 長

柴 田 敏 夫

港 北 区 菊 名 町 五 二 一
電 話 四 二 一 八 六 八 三

保 土 夕 谷 旭 区 仏 教 会 会 長
大 蓮 寺 住 職

田 島 海 義

保 土 夕 谷 区 神 戸 町 九 八
電 話 三 三 一 〇 一 三 五

横 浜 市 仏 教 連 合 会 監 事
曹 洞 宗 圓 光 寺 住 職

赫 田 正 圓

鶴 見 区 朝 日 町 一 一 五 五

横 浜 市 仏 教 連 合 会 副 会 長
西 有 寺 住 職

横 山 敏 明

〒 232 中 区 大 平 町 九 六
電 話 六 六 一 〇 一 六 六

金 沢 八 景 九 覽 亭 の 在 る 禪 刹
昇 天 山 金 龍 禪 院

住 職 志 村 慎 吾

〒 236 金 沢 区 六 浦 町 四 四 二 二
電 話 七 〇 一 一 八 八 二 三

西 区 仏 教 会 会 長
久 成 寺 住 職

佐 藤 寿 応

西 区 平 沼 一 一 二 〇 一 二 六

横 浜 市 仏 教 連 合 会 副 会 長
新 善 光 寺 住 職

福 永 隆 昭

南 区 三 春 台 一 三 三

横 浜 市 仏 教 連 合 会 会 計
福 聚 寺 住 職

森 山 正 城

保 土 夕 谷 区 岩 井 町 五 六
電 話 七 三 一 〇 五 一 八

年 新 賀 謹

中区仏教会会長
大圓寺住職

佐藤 日香

中区大平町九四
電話六四一—四九三三

南区港南区仏教会会長

安藤 総持

高野山真言宗弘誓院住職
南区睦町二—二二一

磯子区仏教会会長

林香寺 川野 清吾

磯子区仏教会副会長

海照寺 瀧川 覚道

磯子区仏教会会計

篁修寺 鬼頭 正胤

坂下町四—十九
森五—九—六

横浜市仏教連合会顧問

財団法人国際仏教興隆協会

事務総長 小沢 省元

金沢区釜利谷町一四四二

横浜市仏教連合会

名誉会長 乙川 瑾映

顧問 小沢 省元

参与 柴田 敏夫

同 津川 翠温

會長 志村 慎吾

副會長 福永 隆昭

副會長 横山 敏明

會計 森山 正城

専務理事 立野 孝善

監事 赫田 正圓

同 鷹巢 道孝

市仏連理事

曹洞宗雲林寺住職

北見 定賢

戸塚区矢部町七八八
電話八六一—一三二四

支部だより

保土ヶ谷、旭区仏教会

積尊成道の日を祝して当区仏教会では補陀山正観寺に於いて成道会法要を厳修致しました。その折の香語、啓白文を記して報告にかえます。

香語

一 炷心香捧真前 同時成道憶当年 今来古往渾如是 夜々星光照大千 成道会敬白文

会長 田島海義

事務

謹み敬つて三宝俯して照鑑を垂れ給え。本日茲に保土ヶ谷、旭区仏教会、並びに仏教奉賛会、合同奉行のもと、大覚世尊八相成道の聖日を迎え奉り、慎しんで誦誦し奉る、大乘妙法蓮華経、観世音菩薩普門品偈、鳩る処の功德、南無大恩教主釈迦牟尼に廻向す、

日誌

- 52・7・15 市仏連会報第五号発刊
52・7・5 中区慰霊堂奉仕(金沢区と交替)
52・9・14 宗教連盟宗教講座
52・10・7 全日仏埼玉大会
52・10・25 三役会議 於西有寺座
52・11・2 市仏通発送
52・11・5 保土ヶ谷旭区仏教会慰霊堂奉仕
52・11・26 3時常務理事会
53・1・13 於、横浜駅西口、ホテルリッチ遷化
53・1・18 19 故安藤文雄老師本葬、会長弔洋

五十二年活動情況

西区仏教会々長 佐藤寿広
1 総会(一月)
新年会を兼ねて総会を開き、本年の事業予定をきめる。
2 花まつり(四月)
西区仏教会最大の行事花まつり

今此ノ三界ハ皆是レ我カ有ナリ其ノ中ノ衆生ハ悉ク是レ吾ガ弓ナリ而モ今此ノ処ハ多シ諸ノ患難ニ唯我一人ノミ能ク為救護ラ大慈大悲常ニ無ク倦懈常ニ求メテ善事ヲ利益ス一切ヲ毎ニ自ラ作ス是ノ念ヲ以テカ何ヲ令シメント衆生ヲシテ得セ入ク無上道速ニ成就スルコトヲ仏身ヲ大慈大悲大恩御報思謝ヘ仰キ願クば此ノ功德を以テ能化所化無始己来罪障懺悔罪障消滅、道念堅固、信力不退、学徳増進、智慧明瞭、多聞強識、一切無障礙願ヘ以テ此ノ功德ヲ普ク及ボシ於一切ニ我等ト与衆生ト皆共ニ成セン仏道ナ

第三回忘年懇親会開かる

ホテルリッチにて

忘年懇親会も回を重ねて早三度目、お互いに気心も知れてくるというものであり、会の運営にも随分とプラスになる。この度の懇親会は、昨冬十一月二十六日横浜駅西口にあるホテルリッチ横浜会館八階で三時からの常務理事会に引続き、席を改めて午後五時半より同所において開かれた。

尚、当日の申し合せにより移動理事会を開催することとなり、事務局に一任されたが、このほど、二月十九日(日)午後四時から熱海米宮の「熱海石亭」に決定、参加費一人二万円(翌二十日(月)午前十時をもって散会する。

退会報告

鶴見区仏教会(松阪秀宏会長)からの報告によれば、鶴見町六八九修験鶴見教会(代表役員吉田智教)は、宗教法人を解散し県知事の認証を得、また、東寺尾一三三日本山妙法寺鶴見小僧伽(代表役員石山善邦)は、代表役員が熱海に常在のため、鶴見区仏教会の申し出があり、鶴見区仏教会全員の承認を得て退会を承認した。従って鶴見区仏教会々員数は三十七ヶ寺となつたわけである。

を円満寺会場で、稚児多数参加、会員総出仕、志村市仏連会長の御話をきき、盛大に行つた。
3 西区社会福祉協議会慰霊祭(六月)
西区長、社会福祉協議会、自治会連合会長、市会議員等出席、久成寺に於て仏教会奉仕、功労故者慰霊祭執行。
4 年次総会(六月)
予算、決算、役員改選等承認
5 北海道有珠山災害見舞(九月)
十万円を全会員から集めて、神奈川新聞社に寄託災害地に送る

涅槃会執行

第三回積尊涅槃会は通知の如く二月十四日午後一時半より金沢区称名寺法堂において執行されるが法要は区内真言宗寺院の主導により挙行することがこのたびの役員会で決まった。休憩の後、二時より三時まで、永井路子氏の「鎌倉武将の素顔」の記念講演があり、その日特に称名寺の好意で金沢文庫で各宗派に關係の深い重要文化財が無料で展示されているのを拝観して散会することになった。

編集後記

五十二年という年は各宗派共に様々なことがあつた様である。いわく、週刊紙に登場する坊さんの数々、悪いことばかりであつた、他山の石と自戒したい。編集子も柄にもなく宗教に首をつつこんだが、僧がする宗教だから僧であつてもなんの不思議もない。僧でありたい。
市仏連会報も第六号、このたびはすっかりおこなれてしまつた。まことに申し分なく思ふが事情あつたと賢察願ひたい。常に記事を書いていないので、いざ編集となると記事集めから取捨撰択どころか雑文書きになつてしまふ。
○会員諸師の常の寄稿が待たれる楽しみ多い会報にしたいし、お互いの消息の交換があつてもよいと思うのである。
○会長の肝入れで専務理事が誕生した。若い頭脳とセンスで、ぱりぱりと仕事をしてくれる。
○若いは、若い人の注入が会にとつては不可欠、会の発展、充実が期待される。
○安藤師が遷化した。名物和尚が他界する、さびしい。
○苦勞して今日の繁栄の時に会う人は幸せだが、繁栄の中から育つ人達の未来が心配だ。